

細川俊夫さんが語る
盟友カンブルランの魅力、作曲への想い



カンブルランとともに（写真提供：細川俊夫）

—6月《定期》では、カンブルラン指揮で細川さんの〈冥想〉を演奏します。本作に込められた思いなどを教えてください。

統宮^{トウキョウ}国際音楽祭は、私の師匠ユン・イサン先生の生まれ故郷に誕生した素晴らしい音楽祭です。2011年の冬、その年の東日本大震災の悲劇を体験した直後でしたので、津波の犠牲者に捧げる鎮魂曲として作曲しました。フクシマの自然災害と原発事故は、私の創作活動に大きな影響を与えました。自然との一体化を音楽で表現することを目指していた私は、あらためて自然の暴力的な力に^{おの}慄き、また自然への畏敬を忘れた現代人の傲慢に気づきました。

曲は、打楽器が宇宙の鼓動のような、周期的な時を静かに刻む響きで始まります。時の刻みが少しずつ細かく激しい連打へと変化します。宇宙の大きな鼓動と自然の暴力を暗示するクレッシェンドに、自然の力を感じていただきたいです。そのリズムを背景に、毛筆の書のような形態の様々なメロディーが歌われます。後半は、悲歌の内容を持っています。

曲は、打楽器が宇宙の鼓動のような、周期的な時を静かに刻む響きで始まります。時の刻みが少しずつ細かく激しい連打へと変化します。宇宙の大きな鼓動と自然の暴力を暗示するクレッシェンドに、自然の力を感じていただきたいです。そのリズムを背景に、毛筆の書のような形態の様々なメロディーが歌われます。後半は、悲歌の内容を持っています。

—カンブルランとは長い付き合いですね。

最初にシルヴァンに出会ったのは1998年のグラーツ音楽祭、クラングフォーラム・ウィーン（現代音楽専門の室内オーケストラ）で新作を初演してもらった時です。シルヴァンは譜面の読みがとても深く、作曲家の本質をすぐ捉えてくれました。2000年のルツェルン音楽祭でも、同じ曲で深みの増した演奏をしてくれました。そして翌年春に、私の初期の重要作〈ヒロシマ・声なき声〉をバイエルン放送響で初演してくれました。この大作を、彼はまるで古典を

演奏するように、深い味わいを持つ音楽に創り上げてくれたのです。

シュトゥットガルト歌劇場で2018年に初演されたオペラ〈地震・夢〉は、シルヴァンからの委嘱作品で、私の最も重要なオペラです。制作過程でも彼から貴重な励ましを受けました。私が途中、テーマの重さに打ちひしがれて弱音を吐いた時も、「大丈夫、お前だったらできる」と強く勇気づけられました。このオペラを彼と創り上げた約3年間は、私の作曲人生の中でも忘れ得ない貴重な時です。

—細川さんが思うカンブルランの音楽の特徴や魅力は何ですか。

彼は指揮者であると同時に、一流のドラマトゥルクであることです。プログラミングにしっかりとした思想があり、抜群の組み方ができる深い音楽的教養を持っています。作品が同時に演奏される曲との比較によって、新しい光を当てられるのです。演奏も、斬新な解釈によって新しい響きとニュアンス、構造を見つけてきます。音響の美しさ、流動性、繊細さ、ダイナミズムを引き出す力は、圧倒的な手腕を持っています。よく知られている名曲でも、もぎたての新鮮な果実を味わうような体験をさせてくれます。彼の演奏会にはいつもワクワクする感じがあって、それがたまらない魅力です。

—細川さんの作曲の原動力は何なのでしょう。また、今のこのような状況下で、音楽にできることは何だと思えますか。

音楽がとても好きなことだと思います。美術や文学も好きですが、やはり音楽の深い響きの中に沈潜する身体的体験は私にとって、「生きてよかった」と思える瞬間です。「そういう喜びを体験できる音楽を生み出してみたい」という欲望が作曲の原動力だと思います。

音楽を聴くことによって、人間の心の世界がどんなに広いか、そこに深い闇の世界があるか、あるいは光に満ちた世界があるかを知ることができます。私は、音楽はライブで体験することが大切だと思います。本当の音楽体験は、生の演奏家の身体から生まれる音を、良き場所で良き聴衆と共有することです。それができない現在、音楽を深く愛する準備をしておく必要があります。心に沈黙を深めておくこと。そしてまた世界に音楽が響き始める時には、これまで以上に新鮮な音楽を味わう喜びに出会えるでしょう。その瞬間を、私は心から待ち望んでいます。

〈作曲家・細川俊夫／聞き手・事務局〉